

家政科短大生のボランティア活動の実態

大妻女大短大 飯田 朝子

目的 近年ボランティア活動は国民が社会と主体的にかかわってゆく手段として、行政、企業、学校で積極的に取り上げが開始され、その社会的評価が高まりつつある気運を示し始めている。特に大学においては入試の評価、社会人になるための準備教育等で、その活動を支援する試みが全国的に広がろうとしている。本学においては1985年より短大家政科教育の一授業科目の中で授業の一環として今日でも継続実施している。そこで本研究は1985年と1994年と10年間の経緯を経て学生の体験したボランティア活動を通じて短大家政科教育においていかにボランティア活動が必要であることを明らかにし、今後の短大家政科教育に役立てるために行ったものである。

方法 ボランティア活動を開始した1985年と1994年について学生の体験したボランティア活動の内容、対象者、活動場所、体験の結果、継続の有無を学生達の提出した体験報告書を分析する方法を取り入れたものである。

結果 1) 学生のボランティア活動の内容は「手伝う」というサービス活動、対象者は「老人」、活動場所は「施設、病人、機関」、体験結果は「体験して良かった」とそれぞれの項目で第1位を占めている。更に体験レポートより学生のボランティア活動に対する意識は10年前に対比し、今日明らかに高揚していることが確認された。2) 学生の自発性を育てる教育の手段としてのボランティア活動が有意義であることもレポートより明らかにされた。3) 人と人とのふれ合いが社会人となるための準備教育として重要であることが明確化された。